（ 続紙 １ ）

京都大学	博士（　人間・環境学　）	氏名	勝　盛　典　子
論文題目	近世異国趣味美術の史的研究		

（論文内容の要旨）

本論文は、池長孟（いけなが・はじめ、1891～1955）が、昭和初期に「日本で製作された異国趣味美術品」というテーマで蒐集した池長孟コレクション（神戸市立博物館蔵）を中心に、江戸時代の、主にオランダと関わりの深い多様な美術工芸作品を研究対象として、それらの歴史的背景を関連する史資料の検証によって解明するとともに、舶載蘭書調査と顔料の科学的分析という二つの新しい方法によって、「近世異国趣味美術」における日欧文化交流史を読み解くことを目的としている。

本論文の構成は、舶載蘭書調査と顔料分析による研究方法を提示した第１部、江戸の洋風画家石川大浪と亜欧堂田善を論じた第２部および第３部、長崎の洋風画家若杉五十八と荒木如元を扱った第４部、輸出漆器・唐木細工などの工芸作品を対象とした第5部、池長コレクション形成の背景をさぐるため池長孟の伝記および池長と牧野富太郎との交流を解明した補論、輸出漆器製造の青貝屋関係文書および唐木細工関係文書の翻刻を収録した資料編からなり、末尾に参考資料・文献目録、初出一覧を付す。

第１部「洋風画研究序説」第1章では、蘭学関係知識人のネットワークの核であった木村兼葭堂の旧蔵蘭書を通して、18世紀後半から19世紀初頭における、兼葭堂と蘭学者・洋風画家や蘭癖大名との情報交換の実態を解明する。第２章では、作品の科学的分析の成果によって、江戸時代における輸入合成顔料プシアンブルー受容の実態を検証するとともに、平賀源内収集の舶載蘭書を視野に入れ、源内から秋田蘭画への、洋風画法の伝播を考察する。

第２部「蘭学と洋風画－石川大浪をめぐって－」第１章では、洋風画家石川大浪と孟高の兄弟の伝記を解明し、大浪の生没年が宝暦12年(1762)−文化14年(1817)であること、伝記不詳であった孟高が、小栗忠擧（ただたか）であることを明らかにする。また、大浪の多数の作品について典拠となった蘭書、画題やサインの変遷に考察を加え、晩年における洋風画から古物・古書画への傾倒を指摘する。第２章では、大浪が大槻玄沢門下の蘭学者山村才助と協力して玄沢の『蘭畹摘芳』『蔫録』、山村才助の『万国人物図纂』や『西洋雑記』の成立に深く関わっていたこと、大浪が正確な海外情報の摂取、大量かつ良質の西洋銅版画の模写によって高度な作品を生み出したことを実証する。第３章では、大浪が所蔵していたニューホフ著『東西海陸紀行』(1682)とフランス語版『イソップ物語』（刊年未詳）を歌川国芳が入手利用したことを明らかにし、学者的な大浪と浮世絵師国芳の蘭書受容の相違を考察する。

第３部「亜欧堂田善の蘭書受容」第１章では、コーフェンス、モルティール社刊『世

界四大洲新地図帳』とワインマン著『顕花植物図譜』の図版や挿絵が田善においては、絵画作品へと意識的に転化され昇華されていく過程を追跡する。また第２章では、田善が「コロンブス謁見図」の典拠としたサンソン『新世界地図帳』の模写状況を検討し、これまで知られていなかった田善と加賀藩との密接な関係を示唆する。

第４部「長崎の洋風画再考」第１章では、長崎において傑出した油彩画の技術を駆使した若杉五十八の伝記と画業を追跡する。また、長崎会所請払役を永く勤めた五十八と住友家との特別な関係を論証し、諸作品の典拠をリーディンガーの銅版画集『狩猟家と鷹匠』（１７６４頃）と特定した。さらに、顔料の科学的分析と日蘭貿易の研究成果をあわせて考察し、高価な舶載顔料を早い時期に大量に使用した特別な画家であることも明らかにした。第２章では五十八と近似した技術と表現を見せながら、多彩な作例を遺した唐絵目利荒木如元の伝記と画業を追跡するとともに、化政期以降、五十八や如元の作品を模倣した西洋風俗図が流行した長崎の洋風画事情の変化を指摘する。

第５部「近世工芸資料にみる異国趣味」では、若杉五十八が輸出漆器の蒔絵プラーク製作に関わった可能性を手がかりとして、工芸資料に関する史資料の探索を行う。第１章では、輸出漆器製作地を確定し工芸資料と長崎洋風画との関連を解明するため、「笹屋」のプラークと「青貝屋」の青貝漆器および１８世紀以降明治初年に至る関連の文献資料を博捜する。第２章では（財）三井文庫所蔵の青貝屋関係文書によって、京都の「青貝屋」が文化３年(1806)に初めて阿蘭陀商売にかかわり、嘉永６年(1853)年に終焉を迎えるまでの、およそ50年におよぶ足跡を追求する。第３章では同じ文書により「笹屋」の輸出漆器製作の拠点が京都にあったことを解明し、長崎における輸出漆器の本格的な生産の開始時期は弘化２年(1845)以降をひとつの目安にすると推論する。第４章では、1762年から1833年に至る歴代の長崎奉行に長崎の御用唐木細工師が献上した細工の雛形集である『御用唐木細工物雛形』を検証し、様式や傾向、時代による変化のほか、唐木細工以外に硝子や陶磁器など長崎でおこなわれた多種多様な工芸技術について情報を読み取り、寛政年間に、それまでの唐風一辺倒から「阿蘭陀形」「紅毛形」への変化の兆しが現れることを指摘する。

結論では各部の内容を要約したあと、司馬江漢や亜欧堂田善を除けば、従来単に異国趣味の作品群として紹介されるにとどまってきた絵画や工芸品について、有名無名をとわず各作品を多角的な検証方法によって歴史的に位置付け、18－19世紀の日欧文化交流の実態を具体的に考察しえたと総括する。また、中国にかかわる異国趣味美術をも視野に入れ、関連史資料をもとにさらなる研究をすすめることを今後の課題として掲げている。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

本論文は江戸時代後期にオランダとの文化交流により生まれた異国趣味の絵画、工芸品を「異国趣味美術」の名のもとに一括して研究対象とし、この種の作品の一大コレクターであった池長孟のコレクションを中心に、諸機関および個人所蔵の関連諸作品を博捜して、実地に多角的に分析するとともに、関連一次資料（古文書・古文献）から発掘した新たな知見と、作品の典拠となった舶載蘭書の挿絵や図版を解明した成果を有機的に結合させた論文である。対象とした絵画資料は２０機関所蔵の９７点、個人蔵１８点、工芸資料は２機関所蔵の１９点、個人蔵１点からなり、その博捜ぶりは極めて周到である。調査した古文書・古文献は２２機関所蔵の８０点、個人蔵２点、古洋書は３１点に及ぶ。

本論文（A４判、本文３３９頁およびカラー図版９０頁）に展開された情報と知見は論者が多年にわたって国内各地で調査研究を重ね蓄積した成果であり、その学術的貢献は論者の採用した研究方法によって、以下の４点にまとめることができる。

（１）洋風画、工芸品（輸出漆器・唐木細工）に関わる広範な史資料探索と正確厳密な読解によって、作者の伝記、作品の成立事情と歴史的文脈について多くの新事実を解明している。とりわけ、石川大浪(1762-1817)、石川孟高（1763-1826）、若杉五十八（1759-1805）について、従来にない詳細な伝記を提示し、全作品の成立年代について説得的な成果をあげたことは高く評価できる。また、輸出漆器の製造、貿易実態に関する従来の研究を大幅に革新している。

（２）若杉五十八作品、伝源内「西洋婦人図」、一連の秋田蘭画（佐竹曙山、小田野直武、田代忠国、佐竹義躬ら）に科学的な顔料分析とりわけ輸入顔料プルシアンブルーの使用に関する分析を加え、油彩画の伝搬経路について文献文書研究の及ばない説得的な仮説を提唱している。これによって若杉五十八、平賀源内の先駆的役割が初めて浮き彫りになった。

（３）作品の典拠となった舶載蘭書の図版や挿絵を数多く解明することによって、画家の技能、資質、関心のありかを分析し、新しい作品解釈を導き出している。石川大浪におけるゴットフリート『史的年代記』（1698）、ファレンテイン『新旧東インド誌』(1724-26)、ニューホフ『東西海陸紀行』(1682)、フランス語版『イソップ物語』、亜欧堂田善における『世界四大洲新地図帳』(18世紀中葉)、ワインマン『顕花植物図譜』、サンソン『新世界地図帳』(1692)の典拠解明は周到鋭利であり、浮世絵師歌川国芳（1797-1861）によるニューホフ、イソップの利用実態の発見と分析は本論文中の白眉である。

（４）典拠となった蘭書の所有者、利用した画家を同時代の蘭学ネットワークと歴史的文脈の中に位置付けることによって、従来の蘭学史において見過ごされ

てきた、地理学・医学・海外情報・画法の分野における蘭学者と洋風画家の緊密な協力関係の実態を解明している。とりわけ、山村才助と石川大浪の事例の解明は新資料『蘭書模写帖』の分析とともに、学界への貴重な貢献となっている。

本論文は多年にわたる多方面の成果と最新の成果を大冊にまとめているために、論理構成の面でやや難点が見受けられる。すなわち、絵画と工芸作品の両方における異国趣味の相互関連が十分説得的ではない点である。しかし、これは論者も認めているように長崎における洋風画と工芸に関連した史資料が十分に伝わっていない事情からやむを得ない面もある。論者が今後の課題としてあげているように、残された分野すなわち中国趣味美術の研究をすすめることによって、異国趣味美術の史的展開について新たな視野が開かれることを期待する。

以上を総合して、本論文は博士（人間・環境学）に値するものと判断する。また、平成２１年１１月１３日論文内容とそれに関連した口頭試問を行った結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日：　　年　　月　　日以降